

夢を志望に、志望を現実に 進路開拓!!
第1学年 大学入試説明会 実施報告

【難関国公立大学】

1. 講演の様子



2. 内容

- ・ 医学部とはどんな所?
- ・ 医学部が求める人材
- ・ 効率よく勉強する方法
- ・ 大学(職業)の選び方

「ヒポクラテスの誓い」から医師としての使命や生涯に亘り医療に精進することを始め、病状1つを瞬時に多方向から考察する力と、高校の学習から大学への学習がどのように繋がっていくのか。記憶の構造から大脳生理学としての見地、そして、診断のプロセスへと繋がる講演でした。

3. 感想など

- ・ 一番心に深く残ったことは、診断の難しさです。「腹痛」という症状1つだけであれほどまでの病のことを考慮に入れなければならないと考えると少し気圧されました。もう1つ残ったことは、「ヒポクラテスの誓い」です。私のイメージしていた医師像に近く、生涯に亘って進歩するために、この時代の科学についていく能力が必要で、今からアンテナを多方面に高感度で向けていこうと思いました。
- ・ 今、医学部医学科へ進学したいと考えています。これから、色々悩むことがあるかもしれないけど自分を信じて、勉強やその他のことにも励んで、夢を実現にさせられるようにしたいと思います。今学ぶことが楽しいと思えているので、それを自分の力にしてがんばりたいです。
- ・ 私は人に面と向かって診断するということが難しい性格だと思います。それでも人助けがしたいという気持ちだけは負けないので、研究の道へ進もうと思います。その分野が医学部でいいのか、薬学や理学部ではないのかと不安ですが、医療を志したいと思います。
- ・ 話を聞いて、やっぱり私は医学部に行きたいと思いました。面白そうな研究をいくつか発見できて医学部に行きたい気持ちが高まってすごくためになりました。
- ・ 医者になるには、数学ができればいいとかそういうことだけじゃなく、考える力、記憶する力とかたくさん必要だと分かった。今の私だとまだまだ医者になるには遠いと思う。だけど、人一倍努力をして、みんなから頼られる医者になりたい。厳しい道のりだと思うけど、まだ時間がある。これからがんばりたい。

医学部医学科進学ガイダンス ～高見剛先生の講演要旨～



さくら塾特別セミナー

2014/03/04

平成26年3月4日、関高校に高見剛先生をお招きし、「医学部医学科へ進学するために」と題して、医師をめざす高校生が知っておくべきことや心構えについてお話をいただきました。たっぷり90分以上お話をいただいた上に、生徒の質問にもていねいに答えてくださいました。以下に先生のお話の要旨をまとめておきます。

医学部とはどんなところ？

まずは医学部の概要説明です。医学部は医療従事者を育成する教育機関であり、かつ医学を研究する機関でもあります。さらに付属病院をもつ診療機関でもあります。

医学部では、系統解剖学、組織学、生理学、生化学、病理学等の学問を通じ、身体や身体の構成最小単位である細胞の構造や反応するしくみ、機能、病気の原因や種類について学びます。これらの分野は医学の基礎。こういうことに興味を持ち面白いと思えることが大切です。

そのほか、薬理学、感染症学、衛生・公衆衛生学、臨床医学についても学びますし、近年では、患者とのコミュニケーションのあり方を学ぶパフォーマンス学も注目されています。パフォーマンスとは、たとえば、医師が患者に病状をどう伝えるかといった問題です。相手(=患者)の感情もありますから、病状を杓子定規に伝えるわけにはいきません。医師の不用意な言葉や表情が、患者に無用な動揺を与えるケースも考えられます。パフォーマンス学は医師に必要なコミュニケーションのしかたを研究する学問分野ですが、医学部で十分教えられているとはいえない状態です。医師になったあとだけでなく、今から皆さんが多くの人との出会いの中で自ら作り出していくことができる分野でもあります。

医学部が求める人材

当たり前のことですが、医師の仕事は「病気を治し、健康の保持・増進に貢献する」ことです。よりよい診断・治療を行うためには常に新しい診断・医療について学ばなければなりません。したがって、医師には生涯にわたるゆめを努力する姿勢が必要とされます。

次に医学部入試のあり方から、医学部が必要としている人材を考えてみましょう。医学部入試で重視されている科目と言えば、やはり数学、理科、英語です。

これらの科目で身につける力は、みなさんが医学を学ぶ上でとても重要なのですが、医学部で専門的に詳しく学ぶわけではありません。だからこそ、大学入試対策を通じて十分学んでほしいのです。数学や理科(とくに物理)では、論理的思考能力や課題解決能力が問われます。医師にとって、数学や物理そのものは直接関係ありませんが、これらの学問を通じて身につける力は医師にとって必要です。

理系志望者にとって苦手かも知れませんが国語も重要です。現代文の入試問題で出題されるような難解な文章を短時間で読んでポイントを掌握する力は、大学での研究活動に必要な不可欠です。多数の論文を読破する力に通じますし、瞬時に的確な決断を迫られる診断プロセスにも生かされます。ですから皆さんには国語をきっちりやってほしい。1・2年生のうちからみっちりやるのが大切です。

医師の診断プロセスについて、例をあげて説明してみましょう。たとえば「急激な腹痛を訴える36歳の女性

患者さん」が受診したとします。医師の頭の中には十数個の病名が呼び出され、それぞれの特徴的な症状や頻度、検査方法が引き出され、速やかな診断そして治療に結びついていかなければなりません。命に関わるケースもありますから、結論を出すまでに時間がかかっているはいけないのです。短時間で適切な判断が下せる医師になるためには、数学や理科などの学習で鍛え上げられた理論的思考法、課題解決能力が役立つのです。

効率よく勉強する方法

受験勉強の仕方は高校の先生に聞けばよいでしょう。ここでは大脳生理学的な見地から皆さんにアドバイスします。まず効率よい記憶法について。人間には、意識にはのぼらないが感覚器官で保持される感覚記憶（アイコンニックメモリ）がありますが、大抵は瞬時（1秒以下）に消えます。記憶を確かなものにするためには、短期間保持される作動記憶（ワーキングメモリ）を、リハーサルを繰り返すことによって長期記憶へと変換させる必要があります。例えば夜覚えたことをもう一度朝リピートするとかといった方法です。完全に忘却してしまう前にもう一度覚えなおしたほうが効果的です。また記憶を強化するための方法として、JRの方が行っている「指差し確認」も効果的。駅員さんが駅でやっているあれです。「指差し確認」は動作・声・目・耳で確認するわけですから、記憶は強化されますので、危機管理の領域ではベストの方法であるといわれています。

勉強を始める時、まず得意科目を60分程度やってみるのもいいですね。好きな科目は脳の働きを活性化させます。その要領を脳にたたき込んで、次に苦手科目をやる時に応用するのです。よく一芸に秀でた人は他の分野でも活躍できるといいますが、それは大脳生理学的に言えば、頭の使い方が分かっているということの意味しています。たくさん勉強することによって脳は活性化しますし、このことはまた、瞬時に的確な判断を求められる医師の診断プロセスにも生かされます。医師という仕事は体力・気力のいる仕事ですから、十分身体を鍛えてほしいですし、せめて夜12時ぐらまでは平気で勉強できる「学ぶ力」も身に付けてほしいですね。

大学(職業)の選び方

皆さんは大学を選ぶ時に将来の職業も同時に考えるでしょう。ここにいる皆さんはすでに医師になりたいと考えているのですが、大学を選ぶ時には各大学が発行している「大学案内」を十分読んでください。学部案内には教えるべき内容が、大学院指導教官案内には研究内容が、それぞれ書かれています。しっかり読んでほしいと思います。そして是非、地元の岐阜大学をめざしてがんばってください。センター利用推薦入試や地域枠入試を効率よく生かすとよいかと思えます。そのためにセンター試験をがんばってください。推薦入試には面接がつきものですが、これには特別な対策が必要です。きちんと対策をたててください。また小論文対策もしっかりやってほしいのですが、中には数学や物理の力が必要とされる問題もありますので、出題傾向をきちんと把握しておきましょう。

そもそも職業を選ぶとは、「何になりたいのか」を決めるということです。いいかえれば、「何に生き甲斐を感じられるか」ということでもあります。興味を持てる職業が見つかったら、自分の体力・知力・性格と考え合わせ、将来の生き方を決めていくとよいかと思えます。このようなポジティブな考え方とは対照的に、「これもダメ」「あれもダメ」といろんな職種を切り捨てて残った仕事から考えるというポジティブな方法もありますが、できればポジティブでいきたいものです。